

企画刊行運営小委員会・建築学会環境基準作成小委員会
合同委員会
2014年度第2回議事録（案）

記録：田中（広島大）

日 時 2014年7月18日（金） 10:30～12:00

場 所 建築会館 305 会議室

出席者 佐土原聡（主査）、田中貴宏（幹事）、金勲（田辺委員代理）、近藤靖史、田端淳、西名大作、平松友孝、松下幸之助（坂上委員代理）
一ノ瀬雅代（事務局）、中村亮輔（事務局）、岡野利行（オブザーバー）

資 料

1. 第1回合同委員会議事録（案）
2. AIJES・集合住宅遮音性能規準、AIJES・集合住宅遮音設計指針等の扱いについて（企画刊行運営委員会主査 佐土原聡）
3. AIJES における審議と成果物のフロー（環境工学委員長 田辺新一）
4. AIJES・集合住宅遮音性能規準，AIJES・集合住宅遮音設計指針等の扱いに関する環境工学本委員会の審議結果を受けて（音環境運営委員会主査 岡野利行）
5. 日本建築学会環境基準－環境基準の分類と位置づけ、環境基準総則
6. 学会規準・仕様書のあり方検討委員会報告書（2001年4月17日）の抜粋

1. 議事録（14/05/16）確認：佐土原主査

- ・ 前回議事録の確認を行った（資料1）。

2. AIJES 総則の見直しについて

- ・ 佐土原主査より前回の委員会以降の経緯説明がなされた後、岡野主査（音環境運営委員会）より音環境運営委員会の見解と要望について説明がなされた（資料2、3、4）。
- ・ 主査判断で、岡野主査（音環境運営委員会）にオブザーバーとして参加していただく旨の説明が、佐土原主査よりなされた。
- ・ 音環境運営委員会からの要望（以下の2件）について審議がなされ承認された。
 1. 新たなフローを今回のES完成原稿（2件）に遡及適用することに関しては、2つの刊行小委員会主査に加え、音環境運営委員会の主査等代表者との意見交換の場を設ける。
 2. フロー見直しは企画刊行運営委員会の事案であるが、当該ES完成原稿（2件）との関連において必要となった場合は、企画刊行運営委員会に音環境運営委員会の主査等代表者がオブザーバとして出席する。

- その後、AIJES の出版フローについて議論がなされた。主な意見は以下のとおり。
 - ISO では、DIS に進む段階でコンセンサスが取れない場合、まず TR（テクニカルレポート）として出版される。そのような形での出版フローを検討できないか。
 - 資料 5 では、「学会基準」「規準」「学会標準仕様書」「指針」の他に、「その他の文書」として「技術の現状」や「考え方」があるとしている。「技術の現状」や「考え方」が、今回想定しているプレ出版に適合するのではないか。
 - 基準（案）として出版、書籍として出版という方法もある。
→これまでの学会出版物が回覧された。
 - ISO では Voting が行われている。国同士の利害関係が関わるので、合意に際しては（内容に関する）取引も行われる。そのようなシステムを入れてはどうか。
 - 空気調和・衛生工学会の基準にもいくつかカテゴリーがある。
 - 「技術の現状」「考え方」を新たなカテゴリーとして作成するには、コンセプトを決め、そのためのフローをつくる必要がある。
 - 「技術の現状」「考え方」を基準に上げるための手順等も決める必要がある。
 - これまでの AIJES の作成フローをつくってこられた方からヒアリングして、新たなフローをつくる必要がある。
 - 総則を改訂するとすれば、どのようなスケジュールになるのか？
→11月の環境工学本委員会にフロー案を提出し、2月の環境工学本委員会で確定というスケジュールを考えている。今回の2件について遡及する場合、体裁の修正になるものと思われる。
 - 最初からテクニカルレポート（もしくは「技術の現状」「考え方」）の出版を意図するということはあるのか？
→最初から、という形は想定していない。フローの最後で分かれるイメージ。
 - 現実的には、基準として実際に使われないとデータは集まらない。
 - 反対意見をゼロにするのは困難。
 - 企画刊行運営委員会で、査読者を指定するということもあり得るのでは。
 - JIS と AIJES が整合しないのは大丈夫か。
 - このまま2つの原稿を出版できないということになるのはもったいない。
 - 如何なる形であれ、世に出さないと進まないのではないか。
- 以上の議論をもとに、AIJES に新しいカテゴリーをつくることが承認された。

3. その他

- 「機械・サイホン排水システム設計ガイドライン」の進捗報告がなされた。
- 次回は10月下旬もしくは11月に開催することとし、後日、日程調整することとした。

以上